

6 鑄掛屋ジョック・ジョンストン

- 「おまえはヨーク浅瀬を越えてきたのか
あの峡谷を通るキングズロードを下ってきたのか
向こう見ずにも城門を出てゆく
騎士ときれいなご婦人を見かけたか」
- 「夜明けに馬で峡谷を越える 5
騎士とご婦人を見かけたな
騎士は漆黒の馬に
ご婦人は銀鼠ぎんねずの馬に乗ってたぜ
- 前に行くご婦人の馬は
銀の鈴を響かせ 飛ぶように駆けてった 10
二頭は朝空を渡る鴉のように
丘を越えてった
- 今頃は 聖マリア教会の礼拝堂で
夫婦めおとになっておいでだろう
草色の絹をまとったご婦人は 15
もう生娘きむすめではあるまいさ」
- 「小癩な若造め 覚えておけ
駆け落ちした二人も身をもって知るだろう
ダグラス家のものには 復讐は蜜の味
魅惑的な乙女の愛にも等しいものと」 20
- 「ダグラス様 そうおっしゃるのなら
助太刀すると誓いましょう
もしあっしが臆病風に吹かれたら
この魂と剣が呪われても構いませんぜ」
- 二人は馬に鞭をあて 羊飼いのいる峡谷を駆け 25
うねるコルス川沿いを下って行った
ダグラスは剣にかけて誓った
必ずや恋人を取り戻す さもなくばもう帰らぬと

「ダグラス様 まずは剣を合わせるこった
大口たたくのはそのあとになさるがいい
ロス伯爵は剣を持てば
比べるものない勇猛な男

30

だがあっしはほんのマルク銀貨一枚か
十三ペニーとボービー銀貨をいただけりゃ
お二人まとめてお相手するか
勝った方をうち負かしてやりますぜ」

35

馬上のダグラスは振り向いて
腹を抱えて大笑い
「大馬鹿者に大勢会ってはきたが
おまえのような頓馬は初めてだ

40

おまえは領主や騎士の血筋のものか
主人に忠実な従者か兵士か」
若者は答えた「あっしはただの鋳掛屋でさ
珍しい兜を見りゃあ 叩きたくなるんでさ」

二人が聖マリア教会についたとき
司祭は怖気づいて震えだし
十字架に口づけしながらつぶやいた
「なんてことだ ダグラスがやってきた

45

あいつは聖書も破門も気にしない
ためらいもなく呪いの言葉を口にする
あいつにとっては 聖職者など
うす汚い野良犬も同然だ」

50

「こっちへこい 腰抜けの司祭よ
さあ さっさと話すのだ
夜明け前にやってきた
ロス伯爵とご婦人をどこに隠した」

55

「ダグラス様 夜が明けてから
騎士にもご婦人にも会っていません
生まれてこのかた
ロス伯爵なんぞ見たこともありません」

60

ダグラス卿は振り向いて

鑄掛屋の顔を覗き込んだ
その顔は笑いをこらえ
意地悪く歪んでいた

「なぜだ なぜだ 鑄掛屋よ 65
生意気にも俺をだましたな」
「あんたに忠誠は尽くしたぜ
してやれる最良のことはしたまでだ

ロス伯爵とあんたの恋人
サールストンの美しいハリエットは 70
夜明け前に西へ向かった
あんたはもう恋人には会えやしねえ

うまいことあんたを
ここまで連れてくるのが上策と考えた
ジョンストン家のものに会おうものなら 75
切り刻まれたにちがいねえ」

この言葉にダグラスは
怒りのあまり言葉も節度も失って
鑄掛屋の頭に剣を叩きつけると
その額から血がしたたり落ちた 80

鑄掛屋は毒づいた 「てめえの魂など呪われてしまえ
これが君主のふるまいか
こんなことしやがるなんざ
到底君主とは呼べやしねえ」

ダグラスは叫んだ 「止めておけ 85
控えろ 鑄掛屋の若僧め」
鑄掛屋は答えた 「止めるものか
馬もろとも倒されてもな」

ダグラス卿は言った 「見ての通り
俺は鎧と兜を付けている」 90
鑄掛屋は答えた 「気にするものか
武具もろとも打ち据えてやる」

ダグラスは言った 「おまえの馬は馬とは呼べぬし
俺の剣は容赦を知らぬ」

鑄掛屋は答えた 「あっしの馬はまさしく名馬 95
見かけよりもずっと役に立つ

剣を構えろ 高慢ちきな君主め
いただいたものをお返ししよう
今日一日を生き延びたら
もう鑄掛屋を打とうなどと思わぬことだ」 100

互いに鋭く激しく打ちかかり
二人の剣から火花が散った
最初の一撃を交えた後に
性急さを悔いたのはダグラスのほう

くまりかたびら
鎖帷子の上に 105
鎧をつけて
固い鉄の兜をかぶっていたが
血が膝までしたたり落ちた

ダグラスはしっかりと
馬にまたがってはいたが 110
鑄掛屋は人間業とは思えぬ剣さばきで
悪魔のように打ちかかった

「お止めなされ 鑄掛屋よ」
泣き声を上げたのは 哀れな司祭
「勇者ジェイムズ・ダグラス卿を傷つければ 115
おまえとおまえの一族に禍いがあるう」

「向こうもきつと嫌だろうが
あっしもダグラス卿に関わるなど真つ平御免
ただあの高慢ちきに
鑄掛屋を馬鹿にするなど言いたいだけだ」 120

二人は打ちかかり 打ち返し
ついにはダグラス卿の息が切れた
ダグラス卿は馬からどうと落ち
鎧はガラガラ鳴り 卿は呻き声をあげた

高慢なダグラス卿はたまらず言った 125
「まさかこんな目に会おうとは
俺の名誉も地に落ちた

今さらどの面下げて君主と名乗れよう

教えてくれ おまえはどここの血筋のものか
巧みな剣さばきをどこで身に付けたのか
麗うるわしのスコットランドで
おまえは最強の鑄掛屋だ」

130

「あっしはジョック・ジョンストン
あんたに隠すこともない
さあ 剣を返してやろう
いい友になろうじゃないか」

135

だがダグラスは固く誓ってこう言った
「決して借りなどつくらぬ
卑しいものの情けにすがって剣をとるくらいなら
いっそこの町で死んだほうがまし

140

だが おまえが我が軍門に下り
仕着せを着て俺の家来になるのなら
おまえを我が右腕とし
おまえに名誉の爵位を授けよう」

「ばかげたことを ダグラス卿よ
あんたの口車に乗るとでも思ったか
あんたの方があっしに雇われ 旅職人になるほうが
はるかに賢いっていうもんだ

145

やかんや兜
女将おかみの鉄鍋なべをたたいて直せ
ダグラス卿よ あっしのこの手で
あんたをりっぱな鑄掛屋にしてやろう

150

日に二回 粥を食わせてやろう
日曜の朝にはご馳走も食わせてやろう
おまえは鉄や銅 真鍮つのや角材の扱いに長けた
腕のいい職人になれること請け合いだ

155

毎朝起きたら 手合わせしてやろう
英雄らしく振舞えるまで
だから 鑄掛屋への弟子入りを
よくよく考えてみるこった」

160

ダグラス卿は内心毒づいて
鞭打たれたごとく身悶えた
鋸もりに突かれた鮭がのたうって
さらに傷を広げる様だった

そこへ ダグラス卿を探す 165
二人の騎士がやってきた
倒れる主あるじを目にすると
忠誠心に火が付いた

獲物を狙う無敵の虎さながらに
二人は鑄掛屋に襲い掛かった 170
だが鑄掛屋は 二人を迎え撃たんと
頼みの剣をしっかりと構えた

「一人ずつ来やがれ 腰抜けの悪党どもめ
組んでもよし 馬上でもよし
あんたらが骨のあるやつらなら 175
手合わせしたと自慢もできる」

十二も数えぬうちに
鑄掛屋は素晴らしい剣さばきで
二人の騎士を地に打ち倒すと
二人の馬は草原の彼方へと逃げ去った 180

鑄掛屋は二人の首と足首を縛り上げ
罵倒の言葉を浴びせかけた
「なんてこった とんだ恥さらしだ
こんな腰抜け騎士など見たことがない」

鑄掛屋は奴らの手綱を引き切った 185
敗者が感じた屈辱はいかばかりか
それから騎士たちをしたたか鞭打つと
二人の足元に血が流れた

無様な姿にダグラスは笑うしかなく
ついには頬に塩辛い涙が伝った 190
「こいつは鑄掛屋の姿をした
悪魔にちがいない」

鑄掛屋はダグラス卿に近づくと
手を取り優しく立ち上がらせた
立派な馬に乗せてやり 195
ヘンダーランドへと連れて行った

「我がダグラス卿よ 気を落とされるな
折れた骨も痛もうが
医者に見せれば傷も癒えよう
失った名誉も回復されよう 200

誓って言おう 我が名はジョック・ジョンストン
見ての通りの 腕利き鑄掛屋
兜を打ち割るのも打ち直すのも
この手にかかれば思いのまま

誓って言おう 我が名はジョック・ジョンストン 205
貴族の方々とも並ぶもの
私はアナンデイルの領主
あなたと同じ 騎士で伯爵だ」

するとダグラスはジョックの手を取り
その手から剣を受けとった 210
「あなたがアナンデイルの領主なら
私が受けた痛手も癒される

あなたが好んで身をやつしても
その高貴な姿からわかってよかったものを
スコットランドが知るその比類なき剣さばきを 215
この事件からイングランドも知るだろう

我らは友であり好敵手
互いの剣を認め羨む
だが 今日のこのふるまいは
一体何のためか想像もつかぬ」 220

「我が友よ 真実を話そう
あなたの恋人を連れ出して
日が昇る一時間前に
ロス伯爵に渡したのはこの私

ロス伯爵は私の兄弟 225

まさに騎士の鑑^{かがみ}と呼ぶべき男
私は千人の家臣を連れ出した
国まで無事に返すため

だが 私は後に残り
あなたを待ち伏せしたほうが良いと考えた 230
あなたを全く違う場所に連れ出して
正々堂々手合わせをしようと決意した

気まぐれに見せかけて
いくつかの命を救おうと
我らの争いを一万の家臣に預けるよりも 235
我が剣によって決しようと考えた

ダグラス卿よ ボーダー地方の争いに
戻られますように
だが 二度と鑄掛屋に戦いは挑まぬこと
アナンデイルのジョンストンかもしれぬから」 240

(鎌田明子訳)